令和５年度第２学期終業式　校長講話

Ｒ５．１２．２２（金）

おはようございます。令和５年度の２学期が終わるにあたり少し話をします。

２学期は、９月２９日に北高祭体育の部、１１月２３日から２６日には２年生の沖縄・宮古島への修学旅行といった大きな行事を行ないました。また、修学旅行中の１１月２４日には、本校での初めての取組としてマレーシアの中高校生を受け入れて、本校１年生との交流行事や文化部の部活動体験などを行ないました。

いずれの行事も、北高生らしい皆さんの積極的な参加や協力で、楽しく充実したものになりました。

さて、１学期の終業式や２学期の始業式ではスポーツの話題を話したのですが、今日は１０月に発表されたノーベル賞の話をします。

今年のノーベル生理学・医学賞は、共にアメリカのペンシルベニア大学教授であるカタリン・カリコ氏とドリュー・ワイスマン氏が受賞しました。カリコ氏は生命現象を科学的手法で解明する女性の生化学者で、ワイスマン氏は男性の免疫学者です。

２人が受賞した理由は、新型コロナウイルスのパンデミック、いわゆる感染爆発を救った、遺伝物質メッセンジャーＲＮＡ（ｍＲＮＡ）を使ったワクチンの基礎技術を開発したことです。ｍＲＮＡという言葉は、皆さんもニュースで何回か聞いたことがあると思います。

皆さんはノーベル賞を受賞するほどの研究者は、多分若いときから、エリートの研究者だったのだろうと思いませんか。私はそう思っていました。しかし、カリコ氏は必ずしもそうではありません。

ハンガリー出身で博士号を取得後３０歳の時にアメリカに渡り、任期付きのポストを転々とした後、３４歳の時にようやくペンシルベニア大学に助教で雇用され、ｍＲＮＡを薬に活用する研究を始めました。当初は全く注目されず、研究費も獲得できず、助教から研究員に降格されました。カリコ氏は当時のことを「落ちぶれる研究者の典型に見えたはず」と振り返っています。

しかし、「ｍＲＮＡを治療に役立てたい」という信念からあきらめず研究を続けていたところ、４２歳の時に同じ大学のワイスマン氏と偶然出会ったことから共同研究を始め、２００５年、５０歳の時に炎症を抑える方法を論文で発表しました。

それでもなかなか注目が集まらなかったのですが、ようやく、ドイツのベンチャー企業であるビオンテック社に注目され、２０１３年、５８歳の時にカリコ氏はビオンテック社に引き抜かれ、副社長に就任しました

そして、２０２０年、６５歳の時に新型コロナの感染爆発が起こると、ビオンテック社はアメリカのファイザー社とワクチンを共同開発し、わずか１１ヶ月でワクチンが実用化されました。私もファイザーのコロナワクチンをこの４年間で何回も接種しましたが、新型コロナのワクチン開発は、カリコ氏が注目されなくてもあきらめずに何十年も地道な研究を続けた成果なのです。

「目標を定めたら、うまくいかないことがあっても、あきらめず努力を続ける」このことは、口で言うのは簡単ですが実行することは簡単なことではありません。

３年生の中には、すでに大学や専門学校の推薦入試を受験した人も多くいると思いますが、いい結果が出なかった人もいるかもしれません。また、現在思うように成績が伸びず悩んでいる人もいるかもしれません。それでも、自分が定めた進路目標に向かって、最後まであきらめず頑張って欲しいと思います。１・２年生も、今自分が取り組んでいることに、学習でも部活動でも、あきらめず頑張って欲しいと思います。

実は、本校の卒業生（８期生）で名古屋大学名誉教授の岡本佳男（おかもと・よしお）氏という方がおられます。岡本氏は、高分子の立体化学研究において優れた研究成果をあげ、ノーベル賞候補の１人と言われています。残念ながら今回の受賞はかないませんでしたが、本校の卒業生にもこうした素晴らしい方がおられることも知っておいてください。

最後に１・２年生に１点連絡をします。すでに１・２年生の教室の後ろにチラシを掲示してもらっていると思いますが、来年度から、夏休み中に希望者を対象に、１０日間のオーストラリアへの語学研修を行います。本校では初めての取組です。在校生への詳しい説明会を２月上旬に行います。１月当初に説明会の案内を行いますので、関心のある人は、是非説明会に参加してください。

それでは最後に、明日から冬休みになりますが、体調に気をつけて、１月９日の始業式には元気に登校してください。以上で私の話を終わります。